

2024年末に、ある日

本人医師が海外での解剖研修において、献体された遺体の前で撮った写真を自身のブログに掲載した件は、ネット上を中心にある種の騒ぎになった。この件は、

結果として所属していた病院を当該医師が解任されるという形で事態は收拾されようとしているが、そもそもなぜこのような騒ぎとなつたのか。人々は何に対し怒つたのか。その理由としてさまざまなもの（例えば、炎上事件における初期対応の拙さといった組織におけるリスク・マネジメント上の問題、

「善意」に応えうるビジネスは実現可能か

人々のエシカルを ビジネスにつなげる課題

など）が考えられるが、献体という「善意」の寄付行為に対し、医師側が自身の技量向上のための「道員」

聰

愛知淑徳大学
ビジネス学部教授

渡邊

わたなべ・さとし 環境・資源
経済学。名古屋大学大学院経済学
研究科博士後期課程修了、博士
(経済学)。1979年生まれ。



として、あるいはより単純に海外での解剖研修というネット上の「映え」を満足するためにしてか感じられない態度による部分が大きいのではないか。

市場経済システムの基盤として、市場の当事者間ににおける信頼や共感といった「社会関係資本」と呼ばれる機能が果たす役割は、経済学の祖であるアダム・スマスをはじめ多くの経済学者が言及してきたが、近年のゲーム理論や実験経済学での研究においてもその重要性は確かめられている。献体を一種の「取引」行動

として、あるいはより単純に海外での解剖研修というネット上の「映え」を満足するためにしてか感じられない態度による部分が大きいのではないか。

ショットをはじめ、ソーシャルビジネスや企業のSDGsへの貢献事業も同様の事態を引き起こさないよう留意する必要があると考え

る。チャリティーショット

は、市民が所有するまだ使

け取り側である医師の背信

と受け取られる姿勢に、人々の怒りの根源があったのではないか。

い、販売収益を環境活動や

社会活動、国際協力などの

原資とするような仕組みで

ある。筆者が進めていく

研究調査で日本において多

様な形態で展開されている

ことが分かっているが、そ

の中でショットへの寄付者

やボランティアの「善意」

に対し、いかに応えられる

かが重要であることも分か

つてきた。チャリティーシ

ョットが、個々の当事者が

目指す社会的事業である

と同時に、ビジネス的手法

を掛け合わせることで、社

会課題解決への貢献と事業

としての持続可能性の両立

を目指したものであるが、

一方でそのバランスが崩れ

る、特に後者の比重が大き

くなることが、結果として

当事者の「善意」に対する背

信となりかねない。これは

企業におけるCSR（社会

的責任行動）やSDGs関

連の事業でも同様であろう。

近年、企業においてサス

テナビリティー対応が急速

に広まつた昨今だからこそ、改めて人々のエシカル

（倫理観）をビジネスとし

て具現化していくかが問わ

れている。

など）が考えられるが、献体という「善意」の寄付行為に対し、医師側が自身の技量向上のための「道員」

わたなべ・さとし 環境・資源
経済学。名古屋大学大学院経済学
研究科博士後期課程修了、博士
(経済学)。1979年生まれ。

わたなべ・さとし 環境・資源
経済学。名古屋大学大学院経済学
研究科博士後期課程修了、博士
(経済学)。1979年生まれ。